

ハイブランド大島紬洋装品の開発

企画支援部奄美市駐在 ○徳永嘉美
(有)興紬商店 興 辰雄

1. はじめに

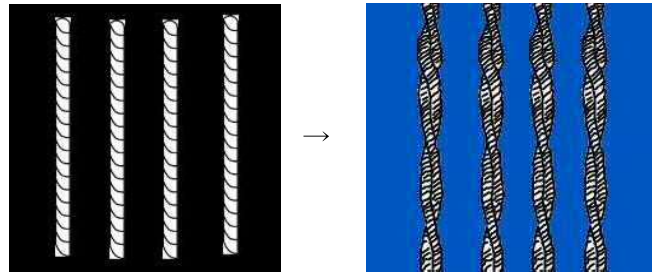
大島紬は明治末、緋縮機を発明することで世界に類を見ない精緻な緋を生みだし、和装の中で他産地の追随を許さない地場産業とブランドを確立してきた。ところが近年、生活様式の洋風化に伴って減退を強いられ、対策として洋装化への模索も行われているが、現況の反物そのものの活用であるため、素材の面では摩擦に弱く、デザインでは地味で和のイメージから抜けきれず功を奏していない。

そこで本研究は、業界で大島紬洋装化への意欲を持っている(有)興紬商店の協力を得て、素材として洋装絹糸使用による大島紬の試作、加飾技術として地すり込み染色による緯総緋大島紬の試作、組織織として高機の2段ろくろへの改造による綾織大島紬の試作等を行ったので報告する。

2. 実験方法

2. 1 洋装絹糸による試作

大島紬の絹糸は強度よりも風合いを重視して、片撚り絹糸を使用している。その理由として、和装は平面裁断で人体を柔らかく包むためテンションの掛かる部位が少ない。そこで洋装向けに強度と伸縮性を高めるため、これまで使用されなかったスレや毛羽立ちが起きにくいとされる諸糸(洋装用絹糸)を活用した。図1に片撚り絹糸と諸撚り絹糸のイメージ図を示す。



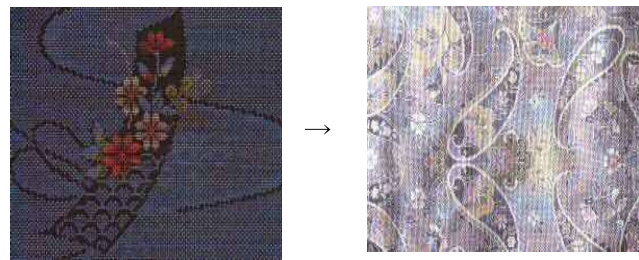
和装用片撚り絹糸

洋装用諸撚り絹糸

図1 片撚り絹糸と諸撚り絹糸

2. 2 地すり込み染め緯総緋大島紬の試作

通常の大島紬の加飾技術は、緋の上に色を染めて図柄表現を行うが、緋と緋の間の地の部分にすり込み染色し、それを緯から地糸を使用せず緋糸のみで織ることで、柄をはっきりと浮き出させて派手さを強調する加飾技術を用いた。図2に通常と地すり込み染め大島紬を示す。



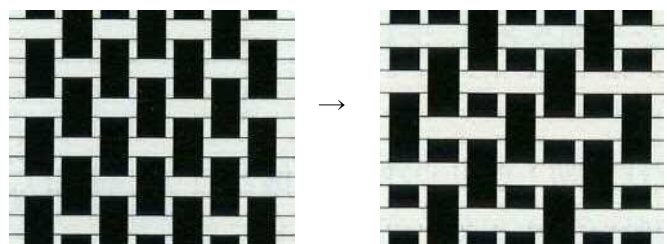
通常の大島紬

地すり込み染め大島紬

図2 通常と地すり込み染め大島紬

2. 3 綾織による大島紬の試作

大島紬の組織は基本的な平織である。着物は直線裁ちであるのでこの組織が向いているが、洋装は曲線裁ちであり洋装に応用するにはデザインに限界があるので、ドレープと重厚さを表現するため平織以外の綾織での製織を試みた。図3に平織と綾織の組織を示す。



平織

綾織

図3 通常の平織と綾織

3. 試作結果

3. 1 洋装用絹糸による黒無地泥大島紬の試作

4000回/m撚りの泥染め諸糸を経緯に製織し、黒無地の大島紬を試作した。これまでの片撚り絹糸での黒無地泥大島紬と比較したところ、泥染めの染着性、風合いに関していずれも遜色ない結果となった。むしろ諸糸の方がドレープ性（ゆったりとして身体にフィットする性質等）に優れていることが確認できた。諸糸は4000回/m撚りしか市販されていないため、今後は撚り数別の諸糸を撚糸し風合いなどの検討が必要である。また洋装化においては自宅で洗濯できるウォッシュャブルへの対応も今後の課題である。試作した経緯諸糸による黒無地泥大島紬を図4に示す。



図4 経緯諸糸無地泥大島紬

3. 2 地すり込み染め緯総緋大島紬の試作

経糸に諸糸を使用し、白とグレーに染めた糸を一元越し式で配置した。このことで、大島紬織織技法の一つであるチラシ方式で白糸に緯緋が交差したところを経緯緋に見せることができるため、図柄に深みが出せることになる。試作品の緯緋はこれまでの片撚り糸で加飾し、緯総緋方式で製織した。試作した地すり込み染め緯総緋大島紬を図5に示す。



図5 地すり込み染め緯総緋大島紬

3. 3 綾織による大島紬の試作

3. 3. 1 高機の改造

現在の高機は平織専用であるので、綾織を行うには2段ろくろの4枚綜統へ改造する必要がある。当センターが保有している2段ろくろ織機を参考に高機の改造を行った。高機を2段ろくろへ改造した事例の綜統部を図6に、踏み木部を図7に示す。



図6 高機改造綜統部

3. 3. 2 2段ろくろ高機による綾織の試作

大島紬の洋装化は平織でも可能であるが、ドレープ性や伸縮性から綾織や朱子織が洋装に適していると考えられる。

組織から洋装化を検討するため、協力企業である(有)興紬商店の織技術者に2段ろくろ高機での製織の研修を行い試作を行った。試作では、平織と綾織を行い比較した。試作事例を図8に示す。



図7 高機改造踏み木部

綾織と平織を比較した結果、図柄に関しては綾織の方がはっきりと浮かび上がって見えた。また素材の特徴に関して綾織りは、斜め方向の伸びが大きく、綾織の伸縮性は平織よりも優れていた。さらに、しわ回復率のドレープ性も優れていた。

4. おわりに

今回の洋装化への試みは、緒に就いたばかりである。派手さが表現できる地すり込み染め緯総緋であっても、図柄が経糸の色で均一に押さえられるためトーンが平準化する。今後は図柄のハイコントラスト表現が可能となる地緋の研究が求められる。



図8 平織と綾織の比較事例